

後期計画の策定に向けた地域検討会議（第1回岩手中部ブロック）会議録 【岩手中部ブロック：花巻市、北上市、西和賀町】

- 日 時：平成31年2月8日（金）10時00分～12時00分
- 場 所：北上市文化交流センター さくらホール1階 小ホール
- 出席者

- ① 会議構成員
 - 花巻市関係者（資料「出席者名簿」のとおり）
 - 北上市関係者（資料「出席者名簿」のとおり）
 - 西和賀町関係者（資料「出席者名簿」のとおり）
- ② 事務局（県教育委員会）
 - 中部教育事務所（資料「出席者名簿」のとおり）
 - 県教育委員会事務局（資料「出席者名簿」のとおり）

- 傍聴者：一般9人、報道2人

○ 会議の概要

◆ 議題及び報告事項

(1) 本県の高等学校教育の現状について

【県教委】

- ・ 本県の高等学校教育の現状について、事務局から説明をお願いします。

【県教委】

- ・ 資料No. 1「岩手県における中学校卒業生数及び高校入学者数の推移」、資料No. 2「再編計画策定に係る取組及び「後期計画」検討スケジュール」、資料No. 3-1「新たな県立高等学校再編計画の概要」、資料No. 3-2「新たな県立高等学校再編計画（前期計画）の推進状況」、資料No. 3-3「高校教育を巡る最近の動き」、資料No. 4「県立高等学校の入試状況の推移（全日制）」、資料No. 5「中学生の進路希望等に関するアンケート結果」に基づき説明。

【佐藤 花巻市教育委員会教育長】

- ・ 参考資料No. 3「新たな県立高等学校再編計画」の16ページにおいて前期計画期間における岩手中部ブロックの再編の方向が示されている。学校別再編計画における花巻南高校の平成31年度学系見直し及び花北青雲高校の平成32年度学科改編について説明をお願いしたい。

【県教委】

- ・ 生徒にとってより良い教育環境を整備していくため、再編計画の着実な推進が重要と考えているが、花巻南高校については、ブロック内の中学校卒業予定者数の見込みや定員充足状況等から、平成31年度の学級減を延期した。

花北青雲高校の学級減の計画を含む2020年度（平成32年度）の県立学校の編制については、原則として再編計画に基づき実施する予定であるが、岩手中部ブロック内の中学校卒業予定者数や各校の定員充足状況等に大きな変化があった場合には実施時期等の変更も検討することとしている。

なお、学級減を実施する場合の学科及び学系の学びの内容の見直しについては、学校を中心に検討を進め、県教育委員会が決定する。

(2) 後期計画策定に向けた意見交換

<意見交換テーマ>

都市部、中山間地・沿岸部における今後の高校のあり方について

【県教委】

- ・ 本県の高等学校教育の現状と課題を踏まえ、意見交換テーマに基づいた御意見をいただきたい。

【上田 花巻市長】

- ・ 花巻南高校の平成 31 年度学系見直し（学級減）及び大迫高校の全国募集「高校生おおはさま留学生」実施に対する県教育委員会の配慮に感謝する。
- ・ 後期計画の策定に向けての現状分析についてであるが、県全体の中学校卒業予定者数は今後大きく減少していく見込みであるが、岩手中部ブロックについては他地域と比較し、その減少幅は小さい状況にある。
- ・ このような状況から、岩手中部ブロックの高校再編を検討する場合は、中学校卒業予定者数が大きく減少する他の地域と同じ視点とならないようにする必要があるのではないかと考えている。
- ・ 平成 30 年 3 月の花巻市内の中学校卒業生 875 人のうち、約 100 人が盛岡地域の高校へ進学している。これは旧石鳥谷町と旧大迫町の区域が盛岡学区に属していることも大きく影響していると思われるが、盛岡学区に属していない旧東和町の中学校卒業生であっても、約 20 人が盛岡ブロック内の高校に進学している。これは、旧東和町から花巻市内の高校または北上市内の高校までの通学時間が比較的長いこと及び、花巻から盛岡まで電車で 40 分という利便性が良いこと等が影響していると思われるが、かつては盛岡ブロック内の高校へ進学する生徒は 2 人程度であったことを考えると、状況は大きく変化していると言える。これは、花巻北高校と黒沢尻北高校の魅力が低下していることも一因ではないかと考えている。
- ・ また、花巻駅近郊に居住する中学生でさえも盛岡地域の高校へ進学している状況もある。このことは、花巻北高校と黒沢尻北高校の魅力低下だけでなく、進学実績のある高校が盛岡地域に集中しているということも原因ではないかと考えている。
- ・ 花巻市、北上市、奥州市内の中学校から盛岡地域の高校へ進学する生徒が増えていることは、地域の高校に入学する生徒を確保するという観点においては、あまり好ましくない傾向であると考えており、この度の後期計画の策定に当たっては、進学実績のある高校の盛岡一極集中を見直すことも検討してもよいのではないかと考えている。
- ・ 別の観点からの意見となるが、花巻市は地域の企業への人材供給拠点となっており、東芝メモリへは市内から約 20 人が就職することとなっている。愛知県等の中部地方に立地している企業の社長からは、花巻及び北上では必要な人材を確保できないのではないかと心配されている。花巻の平成 30 年 12 月の有効求人倍率は 1.71 倍、北上は 2.01 倍となっている。
- ・ このように労働力不足が深刻な時期に、地域への人材供給機関でもある高校の学級数を減らすことは、産業集積の促進という観点からもあまり好ましい施策とは言えないのではないかと考えている。県全体で学級数を減らすことについては少子化の進行の観点からやむを得ないと理解しているが、花巻・北上の岩手中部ブロックについては社会情勢の変化もあり、特別な配慮を施す必要があるのではないかと考えている。

【及川 北上市副市長】

- ・ 国勢調査結果によると、北上市外から北上市内の高校へ通学する生徒の数が減少しており、

今後も同様の傾向が続くのではないかと心配しているが、北上市においても、少子化に伴い、市内の小中学校の再編を進めているところである。

- ・ 当市の小中学校の再編における基本的な考え方は、集団生活による社会性を育成する観点から学校規模の適正化を図ることに主眼を置いており、この点は、「新たな県立高等学校再編計画」の考え方と合致している。
- ・ しかし、小中学校の再編と高校の再編とは大きく異なる点がある。それは、地域へ与える影響の度合いである。高校の募集停止・統合は、地域の賑わいを無くしてしまう可能性があり、結果として地域が衰退してしまうということも考えられることから慎重に検討する必要がある。
- ・ 北上市には、かつて、中心市街地に県立高校が2校設置されていたが、再編等により郊外へ移った。その結果、中心市街地における人の往来が激減してしまったという歴史がある。高校再編は地域へ与える影響が大きいことを念頭に置いた上で、計画を検討する必要がある。
- ・ 県立高校の存続に向けては、高校側も地域とどのように関わっていくべきかを考える必要があると思っている。地域と高校の関わりが優れている事例の1つとして黒沢尻工業高校の取組が挙げられる。
- ・ 黒沢尻工業高校は、3年生の課題研究のテーマとして、黒岩地区をフィールドに生徒の技術を地域に生かす活動に取り組んだ。地域課題の発掘から技術を生かした課題解決までのプロセスを通して、生徒自身が成長するとともに、地域における学校に対する信頼も大きく向上した。現在は二子地区で地域連携を実践しており、小中学校における出前授業（理科授業のサポート）等も行っている。
- ・ このような目に見える形の取組は、地域からの信頼が高まるとともに、中学生の進路選択の一助にもなる。
- ・ 地域との連携・協働が進んでいる高校をやむを得ず再編する場合には、地域との連携を継続できる環境づくりについても配慮する必要があると思われる。

【細井 西和賀町長】

- ・ 国は、人口急減・超高齢化という国全体が直面する大きな課題を克服するため、各地域において、それぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会の創生を目指し、国と地方が役割分担をしながら一体となって取り組む方針を打ち出している。
- ・ 本県においても、各地域において地方創生に向けた取組を進めており、場合によっては、平成28年3月に策定した「新たな県立高等学校再編計画」における学校規模や配置に関する基本的な考え方について、見直しを行う必要性が生じてくるのではないかと考えている。
- ・ 中山間部に位置する西和賀高校は少人数指導が充実しており、毎年、岩手大学や岩手県立大学等の国公立大学への進学者を輩出している。1学年1学級の小規模校ではあるものの、20人ずつの2学級に分け、きめ細かな指導を行っている。大規模校に比較し、教員とも密接で良好な関係を築くことが出来ているものと理解している。また、生徒は部活動においても1年時からレギュラー抜擢のチャンスがある等の理由で、一生懸命に取り組んでいると聞いている。
- ・ このように、地域の小規模校であっても、しっかりとした高校教育を行うことができると考えている。地域の小規模校の募集停止・統合は、地域の賑わいの低下、人口減少の加速化、公共交通の衰退等、地域の存亡に関わる問題につながることから慎重な検討が必要である。
- ・ 「新たな県立高等学校再編計画」において、近隣の高校までの距離が遠く、仮に統合した場合、公共交通機関での通学が極端に困難であることが見込まれる地域の高校については、地域の学びの機会を保障するため、学校の最低規模の基準を2学級としつつも、特例として1学級でも存続させる「特例校」として取り扱うこととしている。西和賀高校もその「特例校」のひとつであるが、後期計画においても、この「特例校」の制度は堅持していただきたいと考えて

いる。

- ・ また、西和賀高校は小規模校ではあるものの、様々な実績を挙げており、これは西和賀高校に勤務する現場の教職員の熱意と努力の賜物と考えているが、教職員にかかる負担は小さくないと考えている。教育の質の保証の観点から、小規模校に配置する教員定数への配慮についても、今後、検討する必要があると思われる。
- ・ 西和賀高校は、平成 30 年度入試において、町外からの入学志願者も含め募集定員 40 人に対し 43 人が受検しており、北上・和賀地区に欠かせない学校であると言える。町は地方創生の一環として西和賀高校の魅力づくりを支援しており、通学・下宿支援の他、「西和賀町まちなか交流館」開設による生徒の学習支援等も行っている。これらの取組は今後も継続していきたいと考えている。
- ・ 後期計画の策定に当たっては、各地域の地方創生の取組の状況や社会情勢の変化等も踏まえ、検討を行う必要があるのではないかと考えている。なお、東北本線沿いの市町村に高校が集中することとなる再編は地方創生の観点からも避けるべきであると考えている。

【佐藤 花巻商工会議所副会頭】

- ・ 花巻市内の中学校から盛岡市内の高校へ進学する生徒は多い。流出を防ぐためにも、市内の高校における「魅力づくり」は必要不可欠である。
- ・ 充実した部活動の実績は学校の魅力のひとつではあるが、将来を担う人材の育成に向け、学力向上に対する取組もしっかりと行う必要があると考えている。勉学と部活動を両立できる教育環境の構築が望まれる。
- ・ また、各高校においては、社会貢献活動にも力を入れていただきたいと考えている。社会貢献活動を通じた地域との協働活動は、地域への愛着と誇りを醸成し、将来の地域の発展に貢献できる人材の育成につながると思われる。
- ・ 平成 30 年 12 月の有効求人倍率は花巻が 1.71 倍、北上が 2.01 倍であり、労働力不足は深刻である。また、平成 31 年 3 月に高校を卒業し、就職を希望する生徒 227 人のうち 222 人が既に内定を得ている。この内定を得ている 222 人のうち、管内就職者は 103 人となっており、地元志向が強いという傾向が認められる。後期計画の策定に当たっては、このような状況も加味した上で検討を進める必要があると考えている。
- ・ 平成 30 年度の新設住宅着工戸数は花巻が 362 戸（前年度 317 戸）、北上が 808 戸（前年度 603 戸）であり、大きく増加している。東芝メモリをはじめとする、ものづくり企業の進出や設備投資拡大の影響が大きいと思われるが、今後においても、人口の社会増が見込まれるものと考えている。後期計画の策定に当たっては、このような社会情勢の変化も考慮した上で検討を進める必要があると考えている。

【高橋 花巻市産業関係者代表】

- ・ 花巻の基幹産業は農業である。最近の農業業界では農作業の省人化、軽労化を目指し、GPS（全地球測位システム）を用いたトラクターの自動運転技術を開発・導入する等、日本の農業の活性化に向けた様々な取組が行われている。また、近年、持続可能な農業経営を目指し、農業法人化が進んでいるが、業界全体として労働力不足は深刻である。よって、農業を担う人材の育成及び地元定着を図る取組が、今後、ますます重要になってくると考えている。世界の人口は増加しており、食糧生産をおろそかにする国は繁栄しないとも言われており、今後においても農業は教育面を含め大事にする必要がある。
- ・ 地元へ人材を定着させるためには、農業に限らず、地元で仕事を安定的に確保できる状態を整えることが条件となる。このことについては、産業界がより一層努力する必要があるが、一方で、地域を支える多様な人材の育成に関しては、地元の高校が果たす役割は大きいものと考

えている。

- ・ 特に専門高校は即戦力として必要な知識・技術を身に付ける場にもなっており、より実践的で、新しい知識・技術を積極的に学べる環境を整えていく必要があると考えている。
- ・ また、他の地域の高校への進学者の増加は、将来の地域を担う人材の不足につながるのではないかと心配している。専門高校をはじめとする各校における学校の魅力づくりに向けた取組に対しては敬意を払っているが、生徒確保に向け、今後においても継続した取組として前に進めていただきたいと考えている。
- ・ 地元で定住する人口の増加に向け、地元高校への進学と地元企業等への就職を支援する取組が今後ますます重要になってくると考えている。

【佐藤 北上工業クラブ顧問】

- ・ 平成 28 年 3 月に策定された「新たな県立高等学校再編計画」は、少子化の進行や社会情勢の変化等を踏まえた精査された計画であると評価している。後期計画の策定に当たっても、「教育の質の保証」と「教育の機会の保障」を柱とした同計画の基本的な考え方を重視して検討を進めていただきたいと考えている。
- ・ 中学校卒業生数は大きく減少していることから、学科改編・学級減等の再編が必要不可欠であることは理解している。しかし、工業に関する学科の改編等を進める中で、「機械」系と「電気、電子」系等の特定の学科に偏った形で集約されてしまうのではないかと心配している。後期計画期間における工業に関する学科の再編を検討する場合には、全県的な視野に立って、「建築」、「土木」、「化学」等もバランスよく配置することを考慮に入れて検討を進めていただきたいと考えている。
- ・ 黒沢尻工業高校をはじめとする専門高校においては、将来を担う人材の育成に向け、資格取得に向けた取組を積極的に進めており、今後も継続していただきたいと考えている。産業界としても、こうした取組をできる限り支援していきたいと考えている。
- ・ 他県において、学校での座学と企業等での実習を組み合わせ教育を行う「デュアルシステム」を積極的に導入している例がある。同システムの導入により、教育の質の向上が図られるとともに、生徒の実践力の向上、勤労観・職業観の醸成が図られたと聞いている。
- ・ 本県においても、高校生インターンシップ事業の更なる強化・充実を図る取組を進めていただきたいと考えている。
- ・ 1 学級の定員は、「新たな県立高等学校再編計画」において 40 人と規定しているが、中山間地域における専門高校の学科の定員については 30 人とする等、県独自の対応が可能かどうかについて研究してもよいのではないかと考えている。
- ・ また、今後、中学校卒業予定者数が更に減少すると、専門高校は複数の学科を設置することが難しくなっていくものと思われる。例えば、工業高校において、1 年次に工業全般の基礎を学習し、2 年次から専門的な学習を行う等、総合学科高校のような対応が可能かどうかについても研究してもよいのではないかと考えている。

【今野 北上商工会議所専務理事】

- ・ 高校教育の充実に向け、産業界として必要な協力は行っていきたいと考えている。
- ・ 人口減少が進む現状において教育の充実を図るためには、小中学校と高校との接続のあり方についても考える必要があると思っている。したがって、後期計画の策定に当たっては、小中学校との連携をどのように図っていくか等の視点も加えた上で、検討を進める必要があると考えている。
- ・ 黒沢尻工業高校等の専門高校については、就職する生徒も多いことから、生徒や保護者に対して、高校卒業後の出口戦略をしっかりと示す必要があると考えている。就職の受け皿となる

企業と連携し、就職後に必要な知識・技術の習得に主眼を置いたカリキュラムを作成する等、新たな連携の仕組みづくりについても検討してもよいのではないかと考えている。

- ・ また、これは普通高校、専門高校に共通する課題となるが、高校卒業後に地域外の大学等へ進学した場合、大学等卒業後に地元に戻ってくる割合はかなり少ないと聞いている。高校は大学等に送り出すことだけを考えた教育・指導だけでは足りず、地域の将来を考えた教育・指導にも取り組む必要がある。具体的には、例えば、大学等への進学希望者に対しても、地域や産業界と連携した効果的なキャリア教育を行う必要があるのではないかと考えている。
- ・ このように、地域の将来を担う人材の育成に向けては、明確な出口戦略と長期的戦略の下で高校教育の充実を図っていく必要があるのではないかと考えている。
- ・ 今後、外国人労働者が増加し、地域においてもグローバル化が進行していくものと考えている。今後の高校教育の充実及び再編計画の検討においては、グローバル化への対応に関する視点も重要になってくるものと考えている。

【刈田 (有)佐々木電気店】

- ・ 西和賀高校卒業後の進路として地元就職する割合は、平成 29 年度までの 5 年間で 6 % から 14% (2 人～7 人) となっており、少ない人数で地域を支えているという実感がある。高校卒業者を対象とした求人数が 5 年前に比較し大幅に増加していることから、今後、地元への就職者が増えることを期待している。
- ・ 西和賀高校は、生徒が主体的に「自分が生きる百年に及ぶ人生」を設計するというキャリア教育の方針のもと、生徒それぞれの進路目標を達成するために、生徒の発達段階に応じて、「総合的な学習の時間」を活用し、計画的に高校 3 年間のキャリア教育を実践しており、平成 28 年度にはキャリア教育優良学校として文部科学大臣表彰を受賞した。
- ・ また、西和賀高校は、小規模校という利点を生かし、生徒が「人生百年を自分で創る」という将来設計への意欲を持ち、主体的に生き方を模索して進路目標を決め、目標達成を目指す指導「いのち輝く百年創造塾」を展開。地域と連携し、学年毎に体験的な学習を積み重ね、地方創生を担う若者を育成する事業を行っている。
- ・ このように、西和賀高校は学校の魅力化に向け特徴的な取組を推進しており、地域、産業界としても、こうした取組を支援していきたいと考えている。
- ・ 「新たな県立高等学校再編計画」において、西和賀高校は、特例として 1 学級でも存続させる「特例校」の扱いとなっているが、後期計画期間においても、引き続き、「特例校」としての位置づけを継続する必要があるのではないかと考えている。
- ・ 県全体で中学校卒業予定者数は今後も減少が続くが、将来を担う人材を高校教育において、しっかりと育成する必要があると、志を持った人材を育成するという観点で教育を行うことが大事であると考えている。そのため、後期計画の策定に当たっては、定員充足状況等の数値だけでなく、それぞれの地域には将来を担う人材を育成する高校が必要であるという視点も取り入れ、検討を進める必要があるのではないかと考えている。
- ・ 県全体で定員割れを生じている高校が多いが、1 学級の定員を 40 人としていることに関し、地域性を踏まえた柔軟な対応を検討してもよいのではないかと考えている。
- ・ なお、各高校それぞれで特色づくり・魅力づくりに取り組むことが県全体の教育の質の向上につながると思っている。今後においても、県全体の高校教育の充実が図られることに期待している。

【高橋 西和賀町産業関係者代表】

- ・ 社会情勢の変化、グローバル化の進展、技術革新の変化のスピードは速く、現在の 6 割の仕事・職業が、近い将来、人工知能やロボットにとって代わられるとも言われており、子どもた

ちが将来就くことになる職業のあり方は、今後の技術革新等の影響により大きく変化することになると予測されている。したがって各高校においては、将来の変化に適切に対応できる多様かつ柔軟なものの考え方が身に付く教育を実践していただきたいと考えている。

- ・ 西和賀高校では、生徒会活動、部活動（運動部）、応援団を掛け持ちし、充実した高校生活を送っている生徒もいる。部活動（演劇部）とボランティア活動の両方に熱心に取り組む生徒もいる。このように、複数の活動を並行して取り組むことができるのは小規模校ならではのメリットではないかと考えている。
- ・ 島根県では、県外からの入学志願者の受入れ「しまね留学」に関し、県が主体的に取り組んでいると聞いている。県にも特色ある小規模校が設置されていることから、県外からの入学志願者の受入れを制度上、可能とするとともに、全国募集について積極的にPRすることを検討してもよいのではないかと考えている。
- ・ また、生徒だけでなく、教員も全国募集してもよいのではないかと考えている。西和賀町には空き家等がたくさんあることから、移住の受入れが可能であることを説明しつつ、例えば、教員の仕事を行いながら農業もすることができるとしてPRすることが可能なのではないかと考えている。
- ・ 小規模校のメリットを打ち出しながら、小規模校の価値を高める取組を進めることを、岩手県の高校教育の特色・特徴としてもよいのではないかと考えている。

【瀬川 花巻市PTA連合会副会長】

- ・ 平成 28 年 3 月に策定した「新たな県立高等学校再編計画」は、教育の機会の保障を柱としているが、教育を受ける機会は等しく与えるべきものであり、後期計画の策定に当たって、後期計画期間中に統合等の検討を行う場合には、通学手段の有無等も考慮する必要があると考えている。また、中学生や高校生の意見を取り入れた検討も必要ではないかと考えている。
- ・ やむを得ず統合を進める場合には、保護者の負担を減らす取組を行う必要があると考えている。学校や駅まで生徒を送迎する保護者がいる一方で、その対応が難しい家庭もある。バイク通学を限定的に認める等の柔軟な対応も必要ではないかと考えている。
- ・ 選挙権年齢が「20 歳以上」から「18 歳以上」に引き下げられた。高校教育においては、社会や世界の課題に関わっていきけるような豊かな人間性と社会性を育むための指導を行っていただきたいと考えている。
- ・ 専門高校における教育に対する意見となるが、専門高校・専門学科の再編が進み、例えば、工業に関する学科においては、建築、土木、化学を学べる学校が少なくなっている。このことに対応するため、専門教員に複数の学校を兼務させることや、設置していない学科の学びを、長期の休み期間中に専門教員を派遣して集中して学べるようにする等の対応が可能かどうかについて、研究してもよいのではないかと考えている。
- ・ 高校卒業後、あるいは大学等進学後に地元就職する人材を育てるためには、地域に学びの場を維持する・設置することは重要であると考えているが、やむを得ず募集停止・統合する場合には、統合校の伝統と誇りを統合先の高校へ、しっかりと引き継げるよう対応と配慮をお願いしたい。

【阿部 北上市PTA連合会副会長】

- ・ 北上市内には、盛岡市や花巻市内の高校へ通学させたいと考えている中学生の保護者がいるが、北上から盛岡の高校へ通うことは、生徒にとっても保護者にとっても負担が大きい。実際に、盛岡市内の高校へ進学した生徒及びその保護者は、その負担を受け入れて一生懸命通学している。
- ・ 地域の高校を選択してもらえよう学校の魅力づくりを進めることは必要不可欠であるが、

魅力化に向けたひとつの方策として、学校の「制服」を見直してもよいのではないかと考えている。特に女子生徒は、志望校の選定に関し、学校の「制服」のデザインが大きな要素となっている。他県においては、「制服」のデザインを変更したことにより偏差値が向上した事例もある。

- ・ 高校のより良い教育環境づくりに向け、小中学校のPTAと高校のPTAとが情報共有及び連携を図る必要性もあると考えている。例えば、高校生の通学や部活動において複数の高校が同一のチームとして活動する「合同チーム活動」の学校間の移動について、小中学校で実施しているスクールバスを高校生も利用できるようにする等の申し入れを、市町村等に行うことができるのではないかと考えている。同様に、高齢者福祉バスを運行している社会福祉協議会等と高校との橋渡しも、場合によっては可能なのではないかと考えている。
- ・ また、花巻清風支援学校の分教室「北上みなみ分教室」が北上市立南小学校及び北上市立南中学校内に設置されているが、市立と県立の連携を強化するため、それぞれのPTAも必要な役割を果たさなければならないと考えている。
- ・ 学校の魅力づくりにおいては、優れた資質能力を備えた魅力ある教員を確保することも極めて重要であると考えている。一例となるが、西和賀高校に魅力ある教員が配置された結果、北上市内から西和賀高校に進学することとした生徒も実際に存在する。このように、授業及び部活動等において、個々の生徒の状況に応じたきめ細かな指導を行うことのできるよう、教員の資質向上を図る取組を進めることも大事であると考えている。

【佐々木 西和賀町PTA連合会会長】

- ・ 近年は、沢内中学校の生徒のうち、約半数が西和賀高校への進学を志望し、残りの半数は盛岡市や北上市内の高校への進学を志望している。かつては、ほとんどが西和賀高校へ進学し、町外の高校へ進学する生徒は極少数であったが、時代の流れの変化は沢内地区についても例外ではないということである。部活動や演劇等のサークル活動に先進的に取り組む高校が盛岡等の町外にある場合、町内の生徒は、その町外の高校への進学を積極的に選択する傾向が見られるようになってきた。
- ・ 西和賀町は、他市町村に比較し福祉施設・事業所の設置状況が充実しているが、労働力不足により閉鎖する施設・事業所も出てきている。これまで、町内の福祉施設・事業所は、将来の地元就職に期待し、西和賀高校の福祉コースの生徒を積極的に研修等で受け入れる等、様々な取組をしてきたが、西和賀高校は平成30年度から福祉・情報コースの生徒募集を停止した。このことも、町内の福祉施設・事業所における労働力不足に影響を与えているのではないかと考えている。
- ・ 後期計画の策定に当たっては、地域の学校を存続させる方策についても併せて検討する必要があるのではないかと考えている。

【佐藤 花巻市教育委員会教育長】

- ・ 資料No. 3-3「高校再編を巡る最近の動き」について、次期「岩手県教育振興計画」では、再編計画の推進において、岩手県の地理的条件等を踏まえた「教育の機会の保障」と望ましい学校規模の確保による「教育の質の保証」を実現していくため、地方創生における地域の学校の役割も重視することが明記されるとのことであった。後期計画は地域の学校の役割を重視しつつ、「岩手ならでは」の特徴的な計画としてほしいと考えている。また、後期計画においても、前期計画と同様に「教育の質の保証」と「教育の機会の保障」を大事にする必要があると考えている。
- ・ 資料No. 3-1「新たな県立高等学校再編計画の概要」において、『社会状況の変化や、生徒減少に対応していくためには、様々な取組を通じて、高校の魅力を高めていくことが求められ

る』ことが説明されている。この「魅力ある学校づくり」の取組内容は高校進学を控える中学生及びその保護者にとって最も重要な事柄であるが、定義があいまいであると感じている。

- ・ 花巻市内の中学3年生の進路志望の状況を2学期に調査を行っているが、899人中、岩手中部ブロック外の高校等への進学を希望している生徒は21%（昨年度よりも割合が増加）も存在する。これは当ブロック内では生徒・保護者のニーズに応えることができない状況を示しているとも言えると思われる。当ブロック外の高校等へ進学を希望する理由をたずねる設問に対しては、世界共通の大学入試資格の取得と国際的な視野を持った人材育成に向けた教育プログラムを導入している国際バカロレア（IB）認定校への進学等を理由として回答している。
- ・ 後期計画の策定に当たっては、こうした調査データも分析しながら、計画の内容が中学生及びその保護者のニーズに合致したものとなるよう検討する必要がある。このことが「魅力ある学校づくり」につながるのではないかと考えている。
- ・ 後期計画においては、「魅力ある学校づくり」の視点を大きな柱とする必要があると思われるが、併設型中高一貫教育校の新設についても検討してもよいのではないかと考えている。
- ・ また、県外からの入学志願者の受入れについても「魅力ある学校づくり」に向けた取組のひとつであるが、花巻市では大迫高校と連携し、平成31年度入試から県外からの入学志願者を受け入れることとした。全国募集については県内外に先行事例があることから、それらを研究しながら、より良い教育環境を整備していくという視点でこの取組を進めていきたいと考えている。
- ・ このような全国募集をはじめとする高校と地域との連携による「学校の魅力づくり」に向けた取組は、成果が現れるまで一定の期間を要する。したがって、後期計画の開始前に、前期計画を検証する期間を設け、ゆとりをもって再編を進めることを検討してもよいのではないかと考えている。
- ・ 県南地域では、ものづくり産業人材等の人手不足が問題となっている。こうした問題の解決に向け、地域の将来を担う人材の育成・供給機関である高校の果たす役割は大きい。もののづくり企業の進出に伴う労働力不足は、工業系の高校のみでは対応できないと考えている。生産物の流通に携わる商業系や人口の社会増加に対応する家庭（福祉）系の高校等も人材の供給という観点で重要である。したがって、工業、商業、家庭に関する学科を設置する花北青雲高校の学級減は、前期計画期間だけでなく、後期計画期間中においても凍結してもよいのではないかと考えている。平成30年度の学級減を延期した花巻南高校についても同様で、同校についても地域への貴重な人材供給機関であることから、花北青雲高校と同様に学級減は凍結したほうがよいのではないかと考えている。
- ・ 高校は地域の「まちづくり」「ひとづくり」に欠かせない存在である。「高校の魅力づくり」について、市としても積極的に支援していきたいと考えている。

【平野 北上市教育委員会教育長】

- ・ 小中学校において、不登校、発達障害等、特別な支援を要する児童・生徒が増加しており、中学校卒業後の進路指導に苦慮している。特別な支援を要する生徒のうち、特別支援学校の高等部への進学が可能な生徒については特に大きな問題はないが、特別支援学校高等部の選考基準から外れる場合に、県立高校への進学が選択肢の1つとなるが、現実的には厳しいのが実態である。
- ・ このような中、少人数指導に定評のある県立高校において、特別な支援を要する生徒の受入れに向け、事前に教育相談に応じる等の対応を行う学校もあるが、今後、こうした県立高校の再編が進むと更に難しい状況になることも考えられる。
- ・ 特別な支援を要する生徒に対しても、自立した社会人としての資質を有する人材の育成に向けた教育が必要であり、今後の後期計画の策定に当たっては、特別な支援を要する生徒への適

切な指導や支援体制の充実の観点も大事にしながら検討する必要があると考えている。

【佐藤 西和賀町教育委員会教育長】

- ・ 西和賀町の平成31年3月の中学校卒業予定者数は24人である。西和賀高校は1学年1学級募集の40人定員であることから、定員充足に向けては、町内のみならず、隣接する北上市等からも入学者を確保する必要がある状況にある。
- ・ 西和賀町を含む岩手中部ブロック全体の中学校卒業予定者数は、今後も大きく減少することはないと見込まれていることから、岩手中部ブロック全体から西和賀高校へ入学する生徒が増えることに期待している。
- ・ 後期計画の策定に当たっては、地域によって中学校卒業予定者数の減少の割合・状況が大きく異なることから、このような実情を踏まえた検討も必要であるとする。中学校卒業予定者数の実数が大きく減少しているのは盛岡ブロックと聞いている。盛岡市内の高校は周辺からの流入により定員を確保している状況であり、このような実情もしっかりと検証する必要があるのではないかと考えている。
- ・ また、岩手県は広い県土を有することから、一律の基準によらない柔軟な対応も必要なのではないかと考える。
- ・ なお、「新たな県立高等学校再編計画」における学校の最低規模については、1学年2学級以上とされているが、近隣に他の高校がなく他地域への通学が極端に困難となることを見込まれる場合、特例として1学年1学級でも存続させることとしており、西和賀高校をこの特例校としていただいたことについて感謝している。
- ・ 今後の高校教育のあり方としては、地域の将来を担う人材の育成に向け、地域産業に関わる知識（農業、水産、工業等）や自然災害への対応に必要な知識（地学等）をしっかりと学べるような施策・取組が必要なのではないかと考えている。
- ・ 文部科学省は2019年度予算として地域振興の核として高校の機能強化を図る事業を行うこととしている。この事業は高校が自治体、大学、産業界等と協働してコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探求的な学びを実現する取組を推進することで地域振興を図ろうとするものである。このような取組を県独自でも展開できないかどうかについて検討してもよいのではないかと考えている。例えば、地方創生の観点から、中山間部の小規模校に対し、県独自で教員を加配する等の取組が可能かどうかについて検討してもよいのではないかと考えている。
- ・ 中山間部にある西和賀町では、小中学生がクロスカントリー競技で大きな成果を出しているが、西和賀高校にはスキー部が無いことから、高校進学時に町を離れている実態がある。よって、西和賀高校にクロスカントリー競技で活躍した中学生の受け皿となるスキー部を設置し、インターハイを目指すことを検討してもよいのではないかと考えている。
- ・ なお、スキーシーズンは入試時期と重なることから、この時期に限りスキーの指導ができる教員を加配することができると進学指導と部活動指導の両方を担当する教員の負担が大きく軽減されると思われる。スキー競技のオリンピック経験者が西和賀町に移住する予定や、競技用のスキー場の整備も検討している。スキー競技を通して地域の活性化を図っていききたいと考えている。
- ・ 町としては、地域活性化に向けた取組の一環として、西和賀高校の魅力化に向けた支援を今後も継続していききたいと考えている。西和賀高校は、特例として1学級でも存続させる「特例校」であるが、この「特例校」を進化させるような取組、具体的には、地域ならではの高校教育を受けることができる学校づくり・魅力化を積極的に支援していききたいと考えている。

【畠山 和賀地区校長会副会長】

- ・ 北上地域は高校進学を控える中学生にとって、恵まれた地域であると言える。盛岡から一関までが通学圏内であり、この範囲内にほぼ全ての選択肢が含まれている。実際に、10年前に比較し、地域の中学生在が進学した高校等の数が大幅に増えている状況にある。これは、各県立高校が魅力づくりに取り組み、その状況を適切にPRしている結果なのでないかと考えている。また、私立高校も部活動を中心に学校の特徴化を図り中学生に積極的にPRをしている。
- ・ 各学校が実施している「中学生のための高校1日体験入学」について、複数の高校の体験入学に参加する中学生もいるが、情報を与え過ぎているのではないかと心配な面もある。北上市内の高校でも定員割れとなっている学校があるが、『あまり勉強しなくても進学できる』と考える中学生も現実的には存在している。
- ・ やはり、一定の「競争」ができる環境は必要ではないかと考えている。高校に進学し、勉強や部活動に一生懸命に取り組む生徒がいる一方で、「たくましさ」が足りない生徒もおり、二極化が進んでいる状況となっている。「切磋琢磨」できる環境をつくることは、教育上、大変重要であり、後期計画の策定に当たっては、このことも重要な検討の視点として取り入れていただきたいと考えている。
- ・ 文部科学省は主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を推進しており、各学校においても教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善が進められている。このような状況の中、県立高校の1学級の定員は40人のままでよいのかについても改めて検討してもよいのではないかと考える。定員割れを防止する観点からも柔軟な対応が可能かどうかについて検討してもよいのではないかと考える。
- ・ 西和賀町の優秀な生徒は町外の高校等へ進学する傾向がある。西和賀高校は学校の魅力づくりに積極的に取り組み、卒業後の進路実績等において大きな成果をあげていることは承知しているが、町外の高校等への進学を希望する生徒の意志は尊重したいと考えている。
- ・ 特別な支援を要する生徒、不登校の生徒は増えている。全県的な支援ができる体制を構築できるとよいと考えている。

【県教委】

- ・ 岩手中部ブロックならではの特徴的な意見をいただいた。県教育委員会単独では対応が難しい意見も含まれていたことから、今後、県の他部局や市町村と連携を図りながら対応を検討していきたいと考えている。
- ・ 教育課程等に対しても貴重な意見をいただいた。今後の教育の内容については、県総合計画や県教育振興計画に取組の方向性等を明記し、しっかり対応していきたいと考えている。
- ・ 高校再編計画はいわゆる「枠組み」の計画ではあるものの、高校が地域振興の核となるよう地域との協働により機能強化を図る必要があるという視点で、今後、後期計画の具体的な検討を進めていきたいと考えている。来年度も2～3回程度、検討会議を開催することとしているが、引き続き、多様な意見やアイデアをいただきたいと考えている。

後期計画の策定に向けた地域検討会議(第1回 岩手中部ブロック)

出席者名簿

No	市町村等	氏名	所属・役職等	備考
1	花巻市	上田 東一	花巻市長	
2		佐藤 良介	花巻商工会議所 副会頭	
3		高橋 章郎	花巻市産業関係者代表(農業)	
4		瀬川 公	花巻市PTA連合会 副会長	
5		佐藤 勝	花巻市教育委員会 教育長	
6	北上市	及川 義明	北上市 副市長	
7		佐藤 秀之	北上工業クラブ 顧問	代理
8		今野 好孝	北上商工会議所 専務理事	
9		阿部 修二	北上市PTA連合会 副会長	
10		平野 憲	北上市教育委員会 教育長	
11	西和賀町	細井 洋行	西和賀町長	
12		刈田 敏	南佐々木電気店	
13		高橋 宏	西和賀町産業関係者代表(農業)	
14		佐々木 篤	西和賀町PTA連合会 会長	
15		佐藤 敦士	西和賀町教育委員会 教育長	
16	地区中学校校代表	畠山 敏	和賀地区校長会 副会長(北上市立和賀東中学校長)	

【オブザーバー】

No		氏名	所属・役職等	備考
17	県議会議員	木村 幸弘	岩手県議会議員	
18		川村 伸浩	岩手県議会議員	
19		佐々木 順一	岩手県議会議員	
20		名須川 晋	岩手県議会議員	
21		佐藤 ケイ子	岩手県議会議員	
22		関根 敏伸	岩手県議会議員	
23		高橋 元	岩手県議会議員	
24	県立高等学校	菅野 慎一	花巻北高等学校長	
25		菅原 一誠	花巻南高等学校長	
26		軍 司 悟	花巻農業高等学校長	
27		佐藤 睦朗	花北青雲高等学校長	
28		菅原 一志	大迫高等学校長	
29		泉 悟	黒沢尻北高等学校長	
30		五日市 健	北上翔南高等学校長	
31		八重樫 大希	黒沢尻工業高等学校 副校長	
32		鈴木 尚	西和賀高等学校長	

【県教育委員会】

No		氏名	所属・役職等	備考
33	県教育委員会事務局等	佐々木 健一	中部教育事務所 企画総務課主幹兼企画総務課長	
34		平賀 英和	中部教育事務所 教務課主任指導主事	
35		岩井 昭	教育次長	
36		佐藤 有	学校調整課首席指導主事兼総括課長	
37		里館 文彦	学校教育課首席指導主事兼高校教育課長	
38		藤澤 良志	学校調整課高校改革課長	
39		宇夫方 聡	学校調整課高校改革担当主任指導主事	
40		梅澤 貴次	学校調整課高校改革担当主査	
41		市丸 成彦	学校調整課高校改革担当指導主事	
42		谷地 信治	学校調整課高校改革担当指導主事	